



| | |
|------------------|---|
| Title | マイクロブログから見る輿論の市民社会 |
| Author(s) | 崔, 衛平 |
| Citation | 年報 公共政策学, 7, 97-104 |
| Issue Date | 2013-10-08 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/53327 |
| Type | bulletin (other) |
| Note | シンポジウム: .北海道ダイアログ: 東アジアにおける市民社会対話. 報告 |
| File Information | APPS7_008.pdf |



[Instructions for use](#)

■ 報告

マイクロブログから見る輿論の市民社会

北京電影学院元教授

崔 衛平

元新華社総編集長の南振中が1998年に最初に「二つの輿論の場」の考え方を提起し、一つは民衆の「口頭輿論の場」、そしてもう一つは新聞メディアが創り上げようとした「輿論の場」である。2008年、氏は一步進んで二つの輿論の場には「相互脱線の危険性」が存在すると指摘したと同時に、「口頭輿論」の範囲を広げ、「ネット論壇と携帯電話のメッセージ」もその中に含ませた。¹⁾

2008年、『人民日報』は新しい下級機構である「人民網輿情監測室」を発足させ、インターネット上の輿論と民心に対する監視と測定を任務とし、「伝統的なメディアのインターネット版（中央メディア、地方メディア、市場化メディア、海外メディアの一部を含む）、ネットニュースのスレッド、ネットコミュニティ／論壇／BBS、マイクロブログ、ネット「オピニオンリーダー」の個人ブログ、ウェブ・サイトなど、インターネットにおける輿論と民心の主なキャリアーを対象に24時間体制の監察を行い、更に専門家による統計や分析を行い、監察分析の研究報告を成果として作り上げる」。²⁾逆から言うと、この監察室の設立は社会輿

論の軽視すべからざる事情も説明している。

2011年7月11日、「二つの輿論の場を貫通させる」というタイトルの文章が「人民網輿情監測室」の署名付きで「人民網」で発表され、その中では、両者間の区別について次のように論じている。

一つは党報、国家のテレビ局、国家の通信社などの「主流メディアの輿論の場」で、ここでは党と政府の方針や政策が忠実に宣伝され、社会主義の核心価値観が伝播される。もう一つは口コミ、特にインターネットの「民間輿論の場」を頼りに、人々はマイクロブログ、BBS、QQ³⁾やブログで時事に関する討論を行い、社会に対する不平不満を指摘し、政府の公共管理に対して批判する。インターネットは「思想・文化・情報の集散地及び社会輿論の拡大装置」となり、「輿論の導く構造」を造り直した。⁴⁾

なぜ二つの輿論の場の間にはそれだけの相違が生じるのか。文章の中では次のような分析がなされていた。「最も重要

1) http://news.xinhuanet.com/book/2008-04/21/content_8018979_3.htm

2) http://news.xinhuanet.com/book/2008-04/21/content_8018979_3.htm

3) インスタントメッセージング(IM)ソフトの一種。中国本土において最も普及しているコミュニケーションツールであり、とくに若者の間で支持され、携帯やメールと同じ感覚で使用されている。(訳者注)

4) <http://opinion.people.com.cn/GB/15119932.html>

なのは次の三点である。公共的な突発事件が起った初期に、政府は対応遅れになりがちで、新聞も真相を報道しないだけでなく、大衆の無理解を問責する。事件が発展・変化する過程では、常に情報の封鎖延いてはネットユーザーを逮捕する手段を用いて民間の輿論の場を弾圧し制御しようとする。事件が鎮静化した後は反省もせず、制度の不完備を修復することもない。更に平時において政府のメディアは民衆の不安や憂慮に対する関心が足りず、プラスになるはずの宣伝は一人芝居ないし自己満足になりがち」という。三点とも一つの「事件」を中心に事件への対処が問題意識となる。一方、事件に対する異なる対応姿勢が、民間の輿論の場の重要な特徴を形成する。

該文章のいちばん最初に引用した事件は、同問題を理解する時の手助けとなる。郭美美という若い女性がマイクロブログで「紅十字会商業総経理」のタイトルで登録した後、高級車とブランド品のかばんの写真を掲載することで中国赤十字会を騒動に巻き込んだ。インターネットでの同事件に対する検索件数は同時期の日本東北地震を上回った。年末の広報では、その年の中国赤十字会への寄付額は六割近く落ちたという。

ここ数年、マイクロブログは「民間輿論の場」の重要な場所となった。140の文字⁵⁾だけでなく、画像の添付も長文テキストもできるし、より重要なのは転送と評論機能があることで巨大なオーラは

5) マイクロブログにはつぶやき一回で140文字の制限がある。(訳者注)

そこで形成される。一つのマイクロブログが50回転送され、25のコメントがなされれば、そこでは一つの見える公共空間が形成され、異なる意見はそこで表現される。新浪微博(新浪マイクロブログ)のように様々な制限を受けつつも、疑いなく政府を批判する声の最も集中する場となっている。だからこそ、2012年5月、人民日報社社長の張研農は復旦大学の公開講演でインターネットの言葉を引用して次のようなことを言った。「半日のマイクロブログを読んだ後で平常に戻るのには、七日間の新聞聯播⁶⁾を見る必要がある」。

また、マイクロブログに留まらず、他のメディアや現実まで拡散し、そこで影響を与える力も存在する。今年マイクロブログで割合影響力のある事件を例として挙げてみよう。

一. 大飢饉の討論

2012年4月29日、人民日報甘肅支社社長の林治波が次の内容のスレッドを立てた。「毛沢東を中傷するために1960-1962年の間の餓死人数は何千万人にも上るとのデマを流した人がいる。そのために、ある人が当時最も情況のひどかった河南省安徽省の村落を訪問した。実情はデマと食い違い、餓死者が出たと聞いた

6) 中国の国営放送である中国中央電視台(CCTV)が、毎日19時00分から19時30分(CST)に放送しているニュース番組である。番組の主な主旨は、中国共産党と中国政府の声を宣伝して、今起きている大きな出来事を伝えることである。(訳者注)

ことがある村の人はいても、餓死者がいたことを証明できた人は極めて少ない」。このスレッドはあっという間に七千以上の転送がなされ（現在はすでに本人によって削除された）、コメントは数え切れず、マイクロブログのホットトピックスとなった。人々は次々と彼を指摘した。それに対して林氏の回答は、家族の中で餓死者が出た者に出会ったことがなかったことであった。

その結果、反響はますます大きくなった。多くの人が自分の家族に死者が出たことを言うために立ち上がった。辛い過去であったが、人々は証明するために立ち上がることを選んだ。筆者のマイクロブログで次のような話を残した者もいた。「私は揚州里下河地区の出身で、その困難な時期にうちの家族だけで餓死者が二人も出た。義祖父と義曾祖父だった。祖母はその時どの家族も餓死した人がいたと言った」(ID: @mom 的流水)。もう一人は次のように言った。「父が朝思い返して話した。実家の村は元々110人前後で、三年後は70人ぐらいになり、自然死亡以外に餓死者は30数人いた」(ID: @薄扶林道82号)。筆者の知識人である友人もマイクロブログで安徽省の実家で家族が死んだ状況を公表した。「うちの叔父は50年代生まれで、60年前後お腹がすいて毒のある植物の種を食べて死んだ」(ID: @何足畏)。

この支社社長の謝罪と辞職の声が上がったため、氏は次のようなスレッドを立ててようやく事件は収まった。「謝罪：私は大躍進の歴史に対する研究が不足で、状況の掌握も足りない。ここ数日たくさ

んの情報をいただき、当時の悲惨な状況を教えていただくことにより私の事実に対する認識が深まり、非常に強い衝撃を受けた。私個人の不当言論が原因で国民の辛い記憶がよみがえ、たくさんの方々の感情を害したことに對し、ここで深くお詫びを申し上げ、謝罪する。同時に皆様の指摘に感謝し、これからは皆様と共に歴史の悲劇が繰り返されることがないように尽力したい」（この詫び状は現在24448回の転送と20675回のコメントを記録している）。このように政府側の人間が自分のつい最近の不当行為に對し直接に公衆に謝罪するのは、非常に稀なことである。

マイクロブログでのこの討論は、あっという間に紙のメディアまで広まった。5月21日の『南都人物周刊』は「1959年-1961年の大飢荒（大飢饉：訳者注）」というタイトルの長編報道を掲載し、内容は香港で出版された、牛犇という作家の著書『大飢荒口述実録』に関するものであった。著書の中で牛犇は自分の故郷の安徽省阜陽県の38名のお年寄を対象にインタビューを行った。この牛寨大隊という場所は1960年の初めから1960年の終わりまでの間、人口は4062人から3132人まで落ち、四分の一に近い人が死んだ。この報道が特別な意味を持つのは、タイトルに使われた「大飢荒」という言葉を直接に使ったことにある。これはそれまで政府側が自らの責任を免れるために使ってきた「三年自然災害」とは違うものだった。一つの事件に対する命名は即ちそれに対する理解である。2012年、雑誌『看歴史』は、この報道に特別奨励を与

えた。

中国において歴史問題は常に政治問題となり、また現実問題となる。誰によって表現されるか、どのように表現されるかは、豊富な政治的エネルギーを内包する。

二. 「表哥」事件

2012年8月26日の明け方、陝西省で36人死亡、2人重体という重大な交通事故が発生した。陝西省安監局（安全生産監督管理局：訳者注）局長の楊達才が現場での視察時の微笑を帯びた表情がネット上で公布され、ネチズンの強い不満を買った。ネチズンは重大な交通死亡事故の場での冷血態度を批判した。公布された写真で氏は高価な腕時計をつけていたため、ネット上で人々の興味を引き起こし、氏に対し「人肉検索」⁷⁾がなされた。ネットで公布された写真から氏は五つの違った場面でそれぞれ違う腕時計をつけ、その価格は低めに推定しても約20万元前後であることがわかった。そのため彼は「表哥」⁸⁾と名付けられた。その後の8月29日の夜、氏は新浪マイクロブログでブログ・インタビューを受けることになり、腕時計による危機に直面することになった。

7) 人肉検索とは、中国のインターネット上において行われている、多数の匿名人物間でやりとりを行いながら、検索エンジンによる検索と、人手による公開情報の検索との両者を駆使し、ある人物の名前や所属を特定したり、事件の真相を解明する活動である。(訳者注)

8) 「表哥」は腕時計の兄ちゃんの意味である。(訳者注)

た。彼の回答が開始する前まで、すでに2000もの質問が待ち構えていた。

氏は、五つの腕時計は違う時期に、それぞれ合法的な所得で購入したものだとして強調した。事故現場での微笑は疲れと重圧から逃れるためのものと弁明した。インタビューの進行中、楊局長の六本目の腕時計がマイクロブログに掲載され、更にインタビューが終わった後の8月30日明け方、七本目、八本目、九本目、十本目が立て続けに掲載され、最終的には十一本となった。これはもはや「表哥」の問題ではなくなり、ネット上では彼のことを「表叔」⁹⁾と呼び始めた。その後彼が13万元のメガネをかけていたことやブランド品のベルトをつけていたことも見つけられ、ネット上では「全身が宝物」と揶揄された。

8月30日当日、陝西省紀委（紀律検査委員会：訳者注）は、楊達才に対する調査はすでに展開し、紀律の違反や腐敗の問題が判明できれば、関連規定に従って厳密に対処すると公表した。時を同じくして平面メディアも追いかけ、新聞紙が事件の報道を開始した。最後になって9月21日に陝西省紀委は西部網（官製のウェブサイト）に陝西省安監局党組書記兼局長楊達才の重大なる紀律違反による免職を公表した。「モナリザの微笑み」から免職まで一ヶ月もかからなかった。

この期間、江蘇テレビのあるアナウンサーはマイクロブログで次のように発言した。「番組がスタートする前、ある領

9) 「表叔」は腕時計の叔父さんの意味である。(訳者注)

導（幹部官僚：訳者注）は腕の時計を外した。しかもいくら天気が暑くても高価な腕時計やベルトを隠すために常に上着をつけている」。ネチズンの間では「ネットは領導を退く余地のないところまで追い込んだ」と評した。その後、何人かのアナウンサーはマイクロブログで「摘表」（腕時計を外す：訳者注）現象を言及した。

「表哥」楊達才が新浪微博のインタビューを受けた時、あるネチズンが「周久耕天価煙事件」を覚えているかと聞いた。2008年12月10日、南京市江寧区房産局局長の周久耕はメディアに対し、「開発商のコストより安い分譲住宅に関しては、これからは物価部門と共に調査と処理を行う」と発言した。この発言はネチズンの不満を引き起こし、氏に対する「人肉検索」が行われた。2008年12月14日、氏が会議に出席した際、その机の上に天価煙の「南京九五至尊」が置かれていた画像が見つかった。このようなタバコは、カートン一つで「一時帰休者三か月分の生活保障費に相当する」と指摘する人がいた。12月15日、周久耕がつけている腕時計は10万円もするものだというスレッドがネットで立てられた。それに続いて彼の弟は不動産開発商人で、息子は建築資材業者であることも明らかにされた。12月29日、周久耕は免職された。一年後の2009年10月10日、彼は収賄罪で11年の刑を言い渡された。

この二つの事件は比較的に典型的で、ドラマチックである。このような「ネット上の反腐敗」が反腐敗の第二の戦いの場となることに対し、それほど楽観的で

ない人もいる。このような事件は、偶然性が強すぎる。しかも腐敗官吏の数から見れば、戦果もあまりにも小さすぎる。だが、公共輿論の側面から観察すれば、このことは一種の民意の雰囲気醸成し、一種の全体的な背景を作り出し、結果として民衆の死活問題をなおざりにする官吏を大衆の嫌われ者にした。

この「二つの輿論の場」のつなぎ役を実現するために、2012年7月22日に『人民日報』はマイクロブログ「人民日報微博」を始動させた。これは象徴的な意味を持つ事件である。二つの輿論の場の対立を無くそうとし、政府の権威を建て直そうとする。折しも北京「7・12」豪雨災害期で、79人の人は大雨で命を失った。中国の首都の脆弱さに対してネット上では驚きと批判に満ちた。「人民日報微博」も即座に憂慮の意を表明した。

7月28日明け方、人民日報マイクロブログから次のような書き込みが出された。「過去の七日間、豪雨は我々に命の無常と重さを感じさせ、周囲の様々な不足と欠陥を認識させた。我々が心の中で銘記すべきは、災難時の愛の贈与と伝達、それに責任に対する堅守と擁護である。この頃流行りの言葉を思い出す。『あなたが立っている場所は、あなたの中国である。あなた次第で中国は変わる。あなたに光りがあれば、中国は暗くならない』。安」。

語調に変化があっただけでなく、ネチズンの言葉を借りれば、「人間の話し」をするようになった。しかもその中の「この頃流行りの言葉を思い出す。あなたが立っている場所は、あなたの中国で

ある…」は、まさに筆者が使った言葉である。ネチズンの中で驚いた人が多かった。なぜなら筆者は「要注意」の異見人士で、このように人民日報が筆者の言葉を引用することは、人々にはまったく新鮮に感じさせるに違いない。たくさんの人はこのスレッドでこの「注目すべき」事実を言及した。この原稿の作成時、このスレッドの伝送回数は75,899回で、コメントは15,518である。これは恐らく人民日報のマイクロブログが設立されて以来最も高い伝送回数のものではないだろうか。原因は不明だが、初期の「人民日報」のマイクロブログでは筆者のことをフォローしたが、数日後そのフォローは取り消された。7月31日の題名「主流メディアと民間の輿論の場を貫き、社会の分岐を補う」の『南方都市報』論説も『人民日報』のこのマイクロブログから論評を展開したものだった。

現時点で「人民日報マイクロブログ」のファンは303万いる。この数字は何を意味するか。四川出身の時事評論家李承鵬（元スポーツ評論家）のファンは642万で、不動産業経営者任志強のマイクロブログのファンは1226万である。この原稿の執筆時、女優姚晨のマイクロブログのファンは2660万である。今年前半、彼女のファンが1955万に上がった時、『人民日報』の若手編集者が内部養成プログラムで、姚晨の発言を受信する人の数は『人民日報』の発行量の七倍に当ると発言した。このことに対して『中国青年報』は姚晨は『人民日報』に危機感を与えたという内容の評論を発表した。

政府側は当然インターネットの巨大な

力を意識し、それを占有しようとする。報道によれば、現時点ですでに4万を超える党政機関と政府役員が政務のためのマイクロブログを開設したという。表立った宣伝フレーズの競争以外、政府側は自身の資源を利用して隠密裡に輿論全体配置の計画や操縦の工作を行った。ネット評論員を展開させることが例の一つである。この人たちは普通のネットユーザーの名を使っているが、口調は統一されている。人々は彼らのことを「五毛」と呼ぶ。地方によってはインターネットと関連する民事訴訟と行政訴訟は、一律立件しないと定めた場所もある。

厳格な審査制度が存在する中国において、インターネットの技術が輿論の公共空間に意外な突破点を与え、輿論において市民社会に新たな道を切り拓いた。元々それ自身が輿論の市民社会である。一般の民衆、大学生、企業家、芸術家、警察、小資本家・ホワイトカラー、知識人らは今マイクロブログでやっているようにお互い顔を合わせ、即時に情報の交換ができたことは、かつてなかった。特に突発事件の際における役割は一層明確である。小売商人夏俊峰¹⁰⁾、温州の呉英（その罪名が「非法吸収公衆存款」）（銀行法違反・無免許営業：訳者注）のような、地方裁判所で死刑が言い渡された裁判に対する訴えや呼びかけは、最終的にはどれも執行までは至らなかった。民衆の声が関連機関に届いたのは明らかであ

10) 夏俊峰は都市管理の役人の暴力執行に対抗する時に役人二人を殺した。殺人罪か正当防衛かをめぐって論争が起きた。（訳者注）

る。

しかし、振り返って反省する必要のある問題もある。

一．比較的に話題性のあるものは往々にして一時的なものが多く、人々はたちまち群がり、また急速に立ち去っていく。マイクロブログの公衆は、「事件公衆」と見なしても良からう。しかし、どういう出来事が「事件」となり得、真の注目すべき話題となり得るかは、あまりにも偶然性が強すぎる。同時に事件公衆の発言には、一種の落ち着きのなさや軽率を特徴とする。例えば愛国風潮問題においても、片方は現実の中の興奮と激情で、もう一方はネット上の嘲笑と風刺である。後者の反応は往々にして条件反射的で、表面的な現象に留まり、その中の構造的なものまで掘り下げることがなく、建設的な視野を生み出すこともない。

二．マイクロブログは即ち個人メディアで、マイクロブログの利用には何一つ障害物がない。多くの利用者にはそれが公共輿論の場であるという意識を持たない。ハンナ・アレントの言葉を借りれば、そこは「雌雄同体」の場であり、そこでは公共領域の情報と個人領域の情報は完全に混同され、公共の立場と個人の立場も混同され、公共の身分と個人の身分もまた混同される。公共の話題は個人の話題として処理され、即ち任意的、横暴的な方式を以って処理され、それは公共理性を培うのには不利である。あるメディアの記者が公の場で次のように述べた。新聞で何かを書く時はメディアの要求の応じて書かなければならないが、マイクロブログでは好きなように話せる。だから

ら現実中のある重要メディアの評論員は個人のマイクロブログでは絶え間なく怒鳴り続けている。また、人々は、権力の圧力の下では力を合わせる必要性が生じ、自分と同じ立場の人たちの非理性的な行動は、往々にして見てみぬ振りをする。

三．中国の現在の状況は、『1984』と『すばらしい新世界』の足し合わせである。プロのネット評論員の浸透も含めて、全体主義が思想の自由や言論の自由を制限する現象は割合人々には認識されやすい。だが、市場という見えない手が、利潤の駆動の下で公共の話題や政治議題を消費し、似て非なるものを作り出し、公共視野を遮り、その中から「既得利益」を獲得することに関しては認識が足りない。マイクロブログというメカニズム自身は広範的な参与の特徴を持つが、平等性は持たない。ファンは金銭によって買収できるものである。だから「玩微博」（マイクロブログを弄ぶ：訳者注）という表現が生まれる。結局のところ、新浪をも含めるポータルサイトは商業的なものでかなりの部分の操縦可能性をひそんでいて独立した公共のプラットフォームとは言いがたい。

四．スレッドは140文字しかなく、思想の表現、異なる視角の体現ないし公共討論自身を制限する。その構成は討論の脱線を困難にし、しかも一貫性に欠ける。思考の展開は漸進的、階層的に進める必要があり、時には一つのスレッドのみでなく、系列のものが必要となる。だが、系列のスレッドでも多く転送されるものはそのうちの一つのみで、前後のものが欠落している状況では、誤解が生じやす

い。このことはスレッドを立てる人には一つの試練となり、自身の公共性には限界があることを意識しなければならないのである。

このことは知識人の仕事に新たな空間を与えた。いかにスレッドの討論における理性を高めるか、いかに公共性を提供

するか、いかにして公共のプラットフォームを広げ、遮られた声を発掘できるか、そしていかにして人々の間の分岐への対処法を学ぶか、これらはすべて新しい課題となる。

2012年12月3日